

## ニドルを寄付した老農夫の話

|                |                                           |
|----------------|-------------------------------------------|
| 百合野 正博         | 同志社大学学生支援センター所長<br>同志社大学商学部教授             |
| 講師紹介〔ゆりの・まさひろ〕 | 〔研究テーマ〕<br>説明責任を負っている集団の提供する情報の検証の重要性について |

## 私は新島大好き・同志社大好き人間

おはようございます。三木先生のクラスの学生さん、おはようございます。今日はいつもと随分話が違うだろうと思います。今、司会の青山先生が気分をリラックスさせるようなお話をされた時に、どっと受けたのは年をとったわれわれの方で、学生さんは何も反応しないで真面目に聞いていたのでちょっとびっくりしました。僕の話もそんなに堅苦しい話でなく、気楽に約一時間を過ごしてもらえたらと思っております。

本日は「ニドルを寄付した老農夫の話」という、同志社にいる人であれば誰でも知っているとされる話です。それにまつわる話と、そこから出た話で、今年の夏アメリカに行ってきたのですが、そういった話を織り交ぜてしようかなと思っております。

実は私は新島襄の研究者ではなく、ただの新島大好き人間、同志社大好き人間です。今日は背広を着てきましたが、ワイシャツのポケットが見えていると、携帯電話に新島先生がぶら下がっているのです。ラグビーをしている新島先生とか、算盤を持っている新島先生とか、いくつかぶら下がっています。もちろん携帯の着メロはカレッジ・ソングです。あと、この部屋にはいろいろな記念品等が並んでいますが、シーリーさんの写真がそこにありますね。新島先生の恩師であって、アーモスト大学の学長になられた方です。今も、三木先生にお話したのですが、私のベッドはシーリーベッド、わざわざシーリーという名前で選んだのではなく、たまたま買ったのがシーリーベッドでした。偶然の一致です。私の乗っている車はイギリスのローヴァー、新島先生が乗っていた船がワイルド・ローヴァー号ですね。でも名前につられて買ったのではないのです。これも偶然の一致です。うちの犬が弁慶号だった、話がストレートに新島先生に繋がっているのですが・・・あまり受けなかったからみんな知らないようですね。新島先生の飼っていたビーグル犬が弁慶号というのです。うちの犬は、みちゃんといって全然関係ありません。

春は同志社に関係のある切手のコレクションを持ってきたのですが、今日は天気が悪いので置いてきました。一番新しいコレクションとしては、まだ届いてないのですが、今月の初めに京都の大丸で行われた「同志社一三〇周年展」で、ワイルド・ローヴァー号の模型を売っていました。値段もそこそこので躊躇していましたら、そこにいた職員の方が、先生、これ一三〇分の一ですよとおっしゃったのです。今年はちょうど同志社一三〇周年ですから、一三〇分の一なら買わないと仕方ないと思って、その場で予約して帰ってきました。それが一番新しいコレクションになるはずです。そんな感じで、要するに同志社大好き人間なのです。

## 創立一三〇周年を迎えて

今年は同志社創立一三〇周年記念ということで、それを記念する催し物を学生支援センターで企画しました。新島メモリアル・ウォークという名前なのですが、新島先生ゆかりのヴァーモント州ラットランドのグレース教会を出発点にアーモストまで歩こうじゃないかという企画だったのです。

これは、学生支援センターが昨年度応募して採択された文科省の特色G Pの予算で実施しました。応募テーマは「大学コミュニティの創造、コミュニケーション・デバイドの克服」というものです。コミュニケーション・デバイドって何でしょう。今同志社には学生さんが二万人ほどいて、京田辺にも一万人いるのですが、見ていると授業のために出てきて、授業が終わればまっすぐに帰っていきます。三木先生の授業以外の人がいたらちょっと手を上げてください。一人だけです。春も新入生は一人だけだったのです。一万人以上ここにいて、こういう催し物があるから話を聞いてみようかなと思っている人は、この時間帯に一人しかいないのです。では他の学生さんは友達と一緒にわいわいやっているかというでもない。ラウンジも多分空いているし、ボックスもガラガラだと思います。みんな授業を受けるために学校にやって来て、授業が終わったらまっすぐ帰っていくのです。

僕の学生時代は、教師の立場ではあまり大きな声では言えませんが、授業にはほとんど出なかった。もちろん面白い授業には出ました。授業に一回、二回出てみて、この授業を一年間受けるぐらいだったら、自分で本を読んだ方がましだと判断した授業には出ない。あるいはこの科目であれば京都大学のなんとか先生がいいじゃないかといって京大まで聴きに行ったりしました。要するに自分で判断して、出る授業もあるし、出ない授業もあるし、別のところで聴く授業もある。あるいは本を読んで済ませることもある。友達と喫茶店でしゃべったり、飲みに行ったり、クラブ活動をしたり、マージャンをしたりという生活をしていたわけです。そこでは、常にコミュニケーションが中心で、学校には友達に会いに来たという印象だったのですが、最近は、皆さんコミュニケーションが下手でなかなか話がうまく伝わらない。同じような話を共有しているところでは話ができるけれども、そうでないとなちまち話ができなくなってしまう。

子どもも一緒に、近所の子どもたちが班を作って登校するのを見ていると、通りのこちら側の登校班と、向こう側の登校班がほとんど話をしない。同じ町内の登校班だからお互い話をしてもおかしくないと思うのですが、グループができてしまうと、そのグループ内では話はするがそれを越えては話をしない。これがコミュニケーション・デバイドと呼ばれる状況です。これは造語なのですが、大学生にもそういう現象があります。

ですから学生支援センターが提供するいろいろな企画に学生を集め、「あっ、こんなこともできるのか」と思った人が、次にいろんな人を集めてきて、同志社に昔のような活気のあるキャンパスを作りたいという企画です。一般学生のデバイド、留学生のデバイド、障がいを持った学生さんのデバイド、それぞれ克服しますよという形で文科省の特色G Pの予算をもらいました。その予算を使って今までいろいろと考えてきたことを、いっぱいやろうということで、去年は食堂など学生さんの集まるところに大きなプラズマテレビを備え付け、京田辺のPRをしています。

## 新島メモリアル・ウォーク

今年の目玉は今言いました一三〇周年の新島メモリアル・ウォークとそれから先通終わりました京田辺祭りです。みんな楽しんだでしょうか。花火を見た人いますか。いたらちょっと手をあげてください。前夜祭に同志社マークの花火が上がったのが見えましたが。京田辺市のマークも上がりました。予想以上にはっきり見えました。ディズニーランドとまではいかなかったけれど七十五発の花火が上がりました。

さて、新島メモリアル・ウォークですが、もとはと言えば今日のテーマ「ニドルを寄付した老農夫の話」から出た企画です。大きいポスターがなかったので少し小さいのを持ってきましたが、五年前の同志社創立一二五周年のポスターです。ここに何が書いてあるかと言いますと、「その農夫は、帰りの汽車賃を日本の未来に捧げた」というふうに書いています。説明では「ラットランドのグレース教会での集会。神学校を卒したばかりの日本人が登壇した。『帰国したらキリスト教の大学を起こしたい』教育と宗教こそ国家の基本、との信念に燃え――」とあります。寄付を集めるためのスピーチをしたのです。合計五〇〇〇ドルほど集まったのですが、その集会の終わりに一人の年老いた農夫が新島先生のもとに駆け寄って、そっとニドルを差し出した。そのニドルというのは何かと言うと、帰りの汽車賃、要するに持ち金、有り金のすべてだったのです。ここに書いてあることによれば、「なに、わしの脚はまだ衰えておらん」。「それから一年――ニドルにこめられた祈りを『礎石』として新島の夢は京都で現実となる」。つまりそのニドルと、もう一人おばあさんがニドルを寄付したのですが、われわれはこの話を昔から知っていて、いや実にいい話だなということなのです。

それと同時に、その老農夫はニドルを寄付していったいどこまで歩いて帰ったのかということが気になるのです。新島襄がお父さんの民治さんに書いた手紙の中にそのヒントが出てくるのですが、その当時ニドルの汽車賃でどれくらいの距離を乗れたと思いますか。春のスピリット・ウィークの時にも質問したのです。まあ、二～三〇キロか、一〇〇キロ前後か。二～三〇〇キロか、一〇〇〇キロ以上か……。二～三〇キロだって一時間に四キロしか歩けませんから、五～六時間はいかかるのです。

実は、新島襄の手紙の中に日本の一里を行くのに六セント、二〇〇文ほど払い申し候という一文が出てきます。一里というのは三・九二七三キロメートルですからニドルで一三〇・九キロ、約一三〇キロ乗れるんですね。でも一三〇キロを歩いたら一日では帰れませんから。これは大変だなと思って、商学部の鉄道の専門家に調べてもらったらマイル二・四セントで、同じように一三〇・九キロなのですね。この一三〇キロという距離なのですが、実はラットランドからアーモストまでの直線距離が一三〇キロなのです。ニドルで行ける距離が一三〇キロ。今年が同志社創立一三〇周年。これも偶然の一致ですね。これは歩くべしということで、実はこの企画がスタートしました。

ですからニドルを寄付した老農夫の話というのはまさにラットランドとアーモストとの距離を歩こうということだったのです。ところが、去年下見に行って、車で走ったらラットランドとアーモストの間は一三〇マイルありました。ざっと二〇〇キロです。歩けるかなと思いながら、学生さんを募集しました。六十名ほどの仮登録だったのですが、この二〇〇キロを四日半で歩ける体力と足の力をつけようということで、年明けから毎日練習したそうです。二日連続のウォークとかを何度もやりながら、そのメンバーを十八人に絞って、最終的には若干抜けましたが、そのメンバーでアメリカに行こうとしました。ところが直前になって、一般道を歩くのは違法であるという連絡が向こうから来ました。

車がビュンビュン飛ばしますから、隊列を組んだ後ろにハザードランプを付けた車をつけて歩こうとしたのですが、それは道路交通法違反だと言われました。いろいろ検討した挙句、結局はアバラチアン・トレイルという山の中の昔の道を歩くことにしました。山の中の道を歩くにはやはりガイドが必要です。去年もちょっと歩いたのですが、猟銃を持っている高校生はいるわ、天候が一変にわかにかき曇って雹が降ってくるわということで大変でした。そんなところを二十人近く歩いて大丈夫かということもあって、実は行ったのは九月十日からなのですが、本当に二週間くらい前まで行けるかどうか分からない状態で計画が進んだのです。でも、幸い行くことができました。

## グレース教会にて

ポストンに入った翌日にラットランドに移動して、そして翌々日にラットランドのグレース教会で出発式をしました。そこにおられるキリスト教文化センターの鈴木先生が最初に礼拝をしてくださいました。

私も記念のスピーチをしたのですが、段上の聖書台に置いてある聖書は新島先生が一三一年前にスピーチした時に使っていた聖書を、今は使っていないけれどわざわざ、探し出して置いてくださっていた。ちょっと感動ものでした。一三一年前に新島襄がここでスピーチをしたのか。そして五〇〇〇ドルを集めて、あるいは二ドルを寄付してくれた人も来てくれて、それが今の同志社を作っているのかと思うと胸がこみ上げてきました。本当に涙が出そうになって、あんなことは初めてだったのですが、どうして自分は今ここに立っているんだろうという思いに駆られてしばらく話ができませんでした。

今も言ったように準備が大変でした。大体去年G Pに採択されなかったら予算がないわけですからもちろん来なかった。私もし学生支援センター所長になっていなかったら、やはりその機会はなかったわけです。

なぜ学生支援センター所長になったかと言うと、前任の学生部長の推薦だったと聞いています。その人と友達だったかと言うと、昔は全然知らなかったし、専門も違います。実は一九八三年に家内と二人でヨーロッパを旅行した時、偶然ローマで彼の先輩と知り合いになったのです。ですからそのことがなかったら、僕がスピーチをすることもなかったかも知れない。つまりいろんな偶然が、ほんとに偶然なのか、あるいは後で言いますが、僕の好きな言葉で、新島先生が一回目の卒業式におっしゃった“A mysterious hand will guide you.”だったのかとか、スピーチをする前にいろんなことを考えて思わず胸が詰まったのでしょうか。

## 「独自一己、自治自立、惻隱不羈」

ですから、私は今年非常に大きな経験をして、そして新たな発見もしてきました。それ以前、今年まではどうだったのかと言うと、お手元にお配りしたコピー「独自一己、自治自立、惻隱不羈」というタイトルです。これは新島襄生誕一五〇年記念の『同志社時報』に書いた文章です。タイトルの字が間違っているのですが気がついた人はいますでしょうか。分かっている人、誰か手を挙げてください。惻隱不羈の「き」が違います。上に西という字がありますが、西ではなくて目を横にしたようなものです。もう一つ。実は今週火曜日に今出川で社史資料センターの主催の同志社一三〇周年講演会で話をしたのですが、その時は私のゼミ生が来ましたので、わつと手が上がりました。さすがに僕のゼミ生は知っていました。そういう話ばかりするの。惻隱不羈の「てき」という字。中が「吉」という字になっていますが、縦棒が下の方に突き抜けていないといけない。土ではなくてもう少し下まで突き出ていないといけない。この二箇所ですが、同志社の出版物なのにこの時代まだこの程度だったのかという感じです。

実はこれには私が一九九〇年から九二年までイギリスに留学していた時に感じたことを主として書いています。新島襄がアメリカで感じたのは、おそらく僕が今イギリスで感じてきたのと同じように、一人ひとりの人間が一人ひとりものを考えて行動をする社会、そういう社会は素晴らしい。新島襄が生きていた江戸時代は封建社会ですから、將軍の子が將軍になる、侍の子が侍になる。上から言われたことには素直に従う、上に歯向かうと切り捨てられるという時代でしたから、新島襄は若い時『聯邦志略』というアメリカの歴史を書いた本を読んで、国民が將軍を選ぶ国はすごいと考えたのですね。將軍の子が將軍になるのではなく国民が將軍を選ぶ国はすごい、これだけでアメリカに行ったわけです。私は専門の研究のためにイギリスに住んでみて、イギリスには貴族もいるし女王もいるし大金持ちもいる。所得格差も随分あります。そういう上下関係が厳然とあると思っていた国が実はそうではなく、一般の人びとが非常に知識を持っているし、その知識をもとに行動する。特に選挙の時なんかものすごく能動的に行動する。そしてわれわれがお上と呼んでいる権力を平気で笑い飛ばすし、そのことをマスコミは恐れずに報道する。日本人には信じられないようなことがいっぱいあった。実はこれが新島先生の一人ひとりが自治自立でなければならないということと結び付いているのじゃないかと思って書いた文章です。

たとえばバブではお酒を飲むものと皆さん思っているでしょうが、バブでオレンジジュースを飲んでも誰もバカにしたりしない。ここに半袖の人がいるようで、なかなか頼もしいなと思うのですが、イギリスに行ってみるとびっくりしたのは、秋冬になっても半ズボン半袖の人がいるし、夏になっても革ジャンパー、セーターの人がいる。つまり一人ひとりが自分で考えて自分で服を着ているのですね。他人の目を気にしていない。日本のように一斉に衣替えですよといって、冬服に替えたり夏服に替えたりしない。あるいはまた道路標識が非常に少ない。自分でスピードを決めて走る。大体五〇マイルで走っていますから八〇キロです。日本だったら高速道路ですね。今出川のキャンパス西門前の烏丸通りは横断禁止になっています。赤信号になったら車はこないのに、余計なお世話ですよ。

先ほどもちょっと言いましたが、選挙になるとイギリス人はものすごく議論するし、そういうテレビ番組も増えますが、今回の日本の選挙のように刺客が送られたというような芸能ニュース的な報道は全くありません。なぜかと言うと、選挙が国のこれからの四年間、五年間を決めるのだから、そんな面白おかしく進んでいけません。日本でもようやく政治番組が増えただけれど、タレントが司会したりして、僕は番組を放送しているマスコミの神経を疑っています。イギリスではマスコミはいろんな報道をしますが全て国民本位です。たとえば交通事故があった時に、三菱パジェロで二人死んだというような報道をするのです。これを繰り返していたら、誰でも三菱の車はおかしいのじゃないかと思うはずじゃないですか。ところが日本では交通事故があっても、メーカーの立場に立ちますから車種は言いません。そうするとこの国は国民のための国なのか、それとも会社のための国なのかということが非常に疑問として出てくるわけです。

僕はイギリスに住んで二つのことを学びました。一つは今説明をしたようにイギリスは主権在民の国です。われわれは教科書で日本は主権在民だと習うのだけれど、ピンときません。今日は時間がないから、また違う機会にお話ししたいと思いますが、日本が主権在民だととても思えない。ところが、イギリスに住むと主権在民を実感します。そういう主権在民の国では、ものすごくたくさんの情報が提供されます。情報というのは皆さんご存知のように本当の情報もあれば、嘘の情報も混ざっています。それをチェックする人間が絶対に必要なのです。僕がやっている会計とか監査というのはまさにそういった情報が本当なのか、嘘なのかをチェックする学問なのです。ですからイギリスやアメリカでは会計士はものすごくたくさんいるのです。日本では非常に数が少ない。それは、情報が提供されないか、チェックされないかのどちらかです。

もう一つはやはり独自一己、自治自立、惻隱不羈だから、誰がなんと言おうと、自分が正しいと思うことは自信を持ってそれをやろうということを学びました。実は私が自分一人で書いた本を出版したのは、一九九九年でした。五十歳になる直前に書いたのです。早い人だったら三十歳で本を書く人もいるのになぜ遅かったかと言うと、実は僕の研究していた内容が日本の監査の通説ではなかったのです。日本の監査では、企業の財務諸表が適正かどうかをチェックしようというのが、何十年も言われてきたことなのです。私はその適正さの中には経営者が不正を働いていないか、企業が違法行為をしていないかということが当然含まれるはずだ、という論文を書いていましたが、それが含まれていないというのが日本の通説でした。アメリカもそうだったのです。おまけに私の研究によればどうもアメリカの会計士監査の仕組みは怪しい。アメリカには会計士がたくさんいるけれども、企業経営者と密接な関係があって、ちゃんと監査をしているように見えているが危うい、とずっと思っていたのです。でもそれを本にするのに躊躇しました。というのは、それこそ君は研究していないのかと言われかねませんから。しかしイギリスから帰って数年後、やっぱりこれだということで一九九九年に出版しました。ところが二〇〇一年、二〇〇二年にアメリカでエンロン事件とかワールドコム事件とか、非常に大きな経営者による不正事件が発覚して、アメリカの会計士監査制度の評判は地に落ちたのです。ですから僕の本は予見していたのです。ちゃんと前もってエンロン事件とかワールドコム事件とかが起こってもおかしくないということを本に残しているのですね。それは新島襄が独自の研究をすればいいじゃないかと言ってくれたというふうにして出版したその成果だろうと思います。

## 私の「巡礼」①—新島墓所

ですから今お手元にあるコピーの文章は、アメリカに新島襄が行って考えたのはこういうことだろうと僕が推測した結果なのです。その後私は方向をちょっと変えました。何かと言いますと、もうちょっと新島襄を研究してみようと思ったのです。つまりそれまでも、もちろん新島襄が好き、同志社の雰囲気が好きだったのですが、もう少し研究してみようと思って巡礼を始めたのです。私にとっての巡礼です。

春のスピリット・ウィークの時に聴いていた一人がメキシコでは巡礼者は一〇〇〇キロぐらい歩きますよと話してくれました。四国の八十八カ所を回る人もずっと歩いています。大事なことに行くためには一〇〇〇キロであろうと二〇〇〇キロであろうと歩くかもしれない。大事なことに行く必要があるか、あるいは行きたいと思うからです。

僕にとつての巡礼というのは、学生時代は京都の若王子というところにある新島先生のお墓でした。お墓とは陰気臭いと思うかも知れませんが、あの有名な哲学の道の一番南から東山のほうに入っていくと若王子神社という神社があって、その横から登っていくと十五分くらいで新島先生のお墓に着きます。休講になると、バイクで十分くらいですからよく行きました。うちの家内ともよくそこでデートをしたくらいです。あの当時は物事を深刻に考える時代でして、これは二冊目ですが私は常に『新島襄書簡集』をジープのポケットに入れたのです。僕は角帽をかぶっていませんが、一応学生服のボタンは全部同志社のボタンにしてポケットに『新島襄書簡集』を入れて、そしてちょっと時間ができると、新島襄の墓へでも行ってみようかと出かける。そこで何をしてもなく、しばらくいるのですね。そうするとその当時は何人かが上がってくるのです。そこだけで会う友達ができて、年に何回かそこで会いました。それが僕にとっての巡礼の第一歩です。自分のゼミを持ってしばらくは、お墓の前の広場でよくゼミをやりました。ところが蚊が多いのでそのうち嫌になってやらなくなりましたが、学生時代はそうだったのです。

## 私の巡礼②—新島海外渡航の地

その次に函館キャンプ。今年はありませんでしたが、また来年ありますのでぜひ行ってほしいと思います。なぜ函館に行くかと言うと、新島襄がここから上海、アメリカに出て行ったという場所があるからです。新島襄海外渡航の地です。これは函館の市電の一日乗車券。地図があって、ここに新島襄海外渡航の地、碑、とあります。向い側に埋め立ての緑の島があって、かかっている橋の名前は新島橋です。すぐそばに襄という店がありますが、しょっちゅうレストランになったり喫茶店になったりしています。この一日乗車券はちょっと珍しいですよ。新島襄の襄に禾偏が付いているのですよ。

函館キャンプの付き添いでそこに行った時に感動を覚えました。今でもここからどこを歩いていたら上海に行けるか全然わからないですよ。そこへ新島襄は江戸から船に乗ってやってきて、そして脱出する機会を密かに伺ってチャンスを掴まえて出て行ったのです。その場所に立った時に、僕は江戸時代の末の人に、どうしてそんなことができたのか、これはすごいことだと感じました。見つければ死罪、一族郎党とも死罪かもしれない。ここから出て行って、アメリカで苦節十年。それが今のこの同志社につながったのか。最初の函館キャンプから帰った後、四年ほどゼミで同じルートをたどりました。夜行の「日本海」に乗って函館へ行って、そして函館で三泊四日ほどのゼミ合宿をやりました。でも、函館へ行って普通に泊まって帰ってくると八万円くらいかかるところをバックツアーですと、二万五八〇〇円くらいで函館と札幌と三泊四日位で旅行できる。ですから三年目か四年目に、一人のゼミ生が「函館だけでなく札幌も行きますか、コストも安いし」というのでついついそれに乗ってしまったら、函館キャンプではなく観光旅行になってしまいました。最初の意義が薄れたので、今はたまにしか行かなくなりましたが、最初は非常に感動しました。

先ほども言いました一回目の卒業式の時に、新島先生が“Go, go, go, in peace. Be strong. A mysterious hand will guide you!”とおっしゃったのは実感だったんだろなあと思いました。函館から一年かけてアメリカへ行って、十年かけて勉強し、そしてお金を集めて帰ってきて、本当にこの仏教のメッカの京都にキリスト教主義の同志社を造った。これはやはりもちろん新島先生が強い気持ちを持って、邁進した結果かも知れないが、やはり何か見えない手が自分を導いてくれたのだなという実感も持たれたのだらうと思いました。ですから函館へ行ったというのは非常に大きな転機で、新島襄は本当にすごい人間だと思いました。いい言葉を残しているの、シンパシーを持っていたのだけれども、それ以上にすごい人だと実感したのです。

### 私の巡礼③—新島生誕地

もう一つ。僕が東京へ行くとしょっちゅうすることがあります。それは新島先生の生まれた場所に行くことです。JRの御茶ノ水駅が水道橋駅で降りて、その辺の人に学生会館はどこですかと聞けばすぐ教えてくれる場所です。学生会館というのは、もとは東京大学の卒業生のOB会のことです。やがては帝国大学全体のOB会の建物となります。ここはもともと安中藩の江戸藩邸があった所です。正面には立派な石碑があり、日本の社会における帝国大学出身者がいかに偉いかということを延々と書いています。その横に回ると汚い木の立て札で、「新島襄がここで生まれました」ということが書いてあって、それを作ったのは、実は町内会の人たちで、われわれの町内、学区が生んだ新島襄を顕彰するといったことが書いてあります。新島襄は、「設立の旨意」の中でも、国が造る、官が造る学校というのは予算も潤沢にあって、そして設備もある。学生にとっては良いところかも知れないが、そういう学校で教育を受けた卒業生が何をするかと言うと、それは国のために働く。われわれが必要としているのはそうではなくて、人びとのためみんなのために働く人である。そのような人を育てるのは私学でなければならない。みんながお金を出し合って造る私学が必要だといったんですね。まさに官学のメッカである東京大学を中心にした帝国大学の卒業生の会館がある場所で、私学がいいと公言した新島襄が生まれたという偶然は、単なる偶然ではないと思います。

新島襄が回顧している文書の中に、自分は天は小さな四角形だと思っていたというのがあります。安中藩邸というのはほぼ真四角だったそうです。子どもの時には安中藩邸から出ないわけですから、そうなったら見上げる空というのは真四角です。子ども時代の新島襄にとって世界というのはその四角だけだったのです。何度も言いますがテレビもインターネットも何もない時代です。唯一本を読むことぐらいしか情報が入ってこない。そういう場所でアメリカに行こうと思いつく、その気づき方というのはすごいと思いませんか。さらに新島襄は、気づいて、考えて、そして、それを実行に移した。これは僕はものすごいことだろうと思います。“Boys, be ambitious.”（青年よ大志を抱け）というのは、そこに展示してある札幌農学校のクラークさんの言葉として定着しています。クラークさんは実はアーモスト・カレッジのOBですが、新島襄はまさに大志を抱いてそれを成し遂げた好例じゃないかと思います。

僕は自分のゼミ生に、“Go, go, go, in peace. Be strong. A mysterious hand will guide you!”という言葉と「大志を抱け」、ちまちまとした人生を送るなというふうにいつも言っています。あるいは、就職活動がもうすぐ始まりますが、就職活動なんか必死にするな、とも言っています。親が聞いたら怒るかなと思うのだけれど、そう言っています。それは、長い人生を、今ここにきている人たちにとって、女性だったら後七十五年は生きますね。九十五歳くらいまで生きます。その長い人生をどう生きていくのかということが重要なのだという意味です。三年生になって就職活動して会社に入って三十二歳くらいで一人子どもを産んで、その程度の「幸せな人生」を送りたいのか、と僕は思うわけです。もっといろんなことができるのじゃないかな。学校を造らなくてもいいけれど、こうやりたい、ああやりたいと思ったら、何でもできるチャンスはいっぱい転がっているのじゃないか。そのことに気づいていないし、そのことを考えてないし、そのことを実行できるとも思っていない。それが僕にとっては、新島襄との対比でみんなに言いたいことなのですね。

ですから僕は国内でそういった聖地に巡礼をするのです。東京に行くともず天ぷらを食べる落語を聞くのだけれども、その次は新島襄の生誕の地へ行く。函館へ行ったらウニを食べて地ビールを飲むのだけれども、やはり脱国の地、海外渡航の碑のところにいく。京都にいたら、最近足がちょっと辛くなってきたけれど、ゼミの一回目は今出川の良心碑から、若王子の新島先生のお墓まで歩いて、裏側の南禅寺に降りて円山公園でコンパをするというのを続けていく。これがやはり同志社に入った意味だろうと思います。

### 私に今できること

今年のグレース教会は実は四番目の巡礼の場所になったわけですが、ここよりも広いけれども、そんなに大きくないところでした。たとえば東京ドームで五万人を相手にスピーチをしたのなら、彼らが家に帰って友人知人に喋れば、十何万人にその話は伝わっていくし、今だったらテレビ中継があればみんな見てくれるかもしれないけれども、テレビもない、インターネットもない時代、わずかに「ラットランド・ヘラルド」という新聞には記事が載っていますから、取材に来ていたのだらうというふうに思います。そんな小さなところで訴えたことが、やがてこの同志社を造るぐらい大きなことにつながっていくのだということが実感できました。今ちょうど今出川キャンパスのNeesima roomで新島先生のいろんなものが展示されています。ノート一つを見ても、新島先生が賢いことがわかります。しかしいくら勉強しても、その勉強を生かさなかったら、勉強したことには意味がないと私は思います。

ですから、新島襄があつたラットランドの教会でしゃべったことが同志社につながるのであれば、私が同志社でこういう機会を見つけて話すこと、あるいは授業で新島襄について触れること、これだって将来大きなことにつながっていくかもしれないと思っています。

私は入学式のときに、「同志社大学設立の旨意」を朗読しました。誰か覚えていますか。「回顧すれば既に二十余年前、幕政の末路——」と暗唱できるくらいに練習をしたのです。新島襄が書いたわけではないですが、ものすごくいい文章です。長い文章のいいところばかりを纏めた文章ですから、読んでいても大変気持ちがいいものです。チャンスがあればぜひ読んでみてください。

実は私は同志社だけでこのような話をしていてわけではありません。ほかの学校へ教えに行っても、同志社がいかに素晴らしいか、新島襄がいかにすごい人かということをしゃべっているのです。そうしたら、一昨年大阪のある大学での試験の採点をしていたら「答案用紙の裏も見てください」と書いてあるのです。それで裏を見たら同志社カレッジソングの一番から四番まで書いてあるのです。別の大学の学生ですよ。同志社だと答案の裏にカレッジソングを書く学生はそこそこいるのですが、同志社でないですよ。びっくりすると同時に感動しました。ですからやはりいろんなところでこれを話すべきだと自信を深めました。

### 「しかし新島襄です。」

ところがお手元のコピーに書いてあるように「いささか陳腐化した」とその当時は書いているのです。僕自身の中にも今でも新島襄かという気持ちがあったのです。同志社は最近でこそいろんなことをやっています。新しい学部ができる、研究科ができる、GPもいっぱい採択される。京田辺でお祭りもした。今年の秋のキャンパスに新島襄の顔の多いこと。この教室の前にもバタベタとポスターがいっぱい貼ってあるでしょう。新島襄の顔の入ったものを。今出川に行ったらもっと多いですよ。中でも一三〇周年記念講演会のポスターで、岡本一平という大変人気のあった昔の漫画家を書いた新島襄の絵を入れているのですが、これがまた素晴らしい。やもすると新島襄は陰気そうに見えるのだけれども、この岡本一平の描いた絵は、ほのぼのと、学生思いのいい先生だったやろなという絵です。それとこのスピリット・ウィーク、それから一三〇周年記念のポスターがばっくと貼ってあるものだから、キャンパスを歩いたら、新島襄、新島襄、新島襄。

でも私が大学に入ったころはそんなに新島襄、新島襄と言っていなかったし、お手元の文章にも陳腐化した言い方になるがと謙遜して書いていますよね。しかし新島襄です。なぜかと言うと、新島襄は一三〇年前の人ですから、ものすごく昔の話に思えるのだけれど、僕のお友達というか、先輩に藤井清さんという札幌在住のおいしいさんが、いつも私は新島八重さんの病床へ行って握手をしましたと話されるのです。その人はまだピンピンしておられます。京都にも来られますし、グリークラブのOBなので大きな声でカレッジソングを歌われます。八重さんは新島先生が亡くなってからも、ずっと長生きしたということもあるのだらうけれども、でも新島先生の奥さんと握手した人がまだ生きているのですよ。それぐらいの瞬間です。ですから決して昔々の話というわけではないわけです。

勝海舟が同志社は何年でできますかと聞いたときに、新島襄は二〇〇年と答えたそうです。今年はまだ一三〇年目です。まだまだ道半ば。先ほども言ったように日本ではイギリスやアメリカと比べて、自治自立、独自一己、憫憫不羈な人間が少ないわけだから、同志社の教育理念、新島が燃え立たせたその思いというのはまだまだ日本では必要とされているわけですね。とすれば、今われわれは新島の思い、あるいはずーっと選べば、ラットランドの教会でニドルを寄付してくれた老農夫のその思いというものを、二〇〇年に向かって伝えていく責任があるのじゃないかなというふうに思っているわけです。ですから私は、機会を見つけてはこの話をし、チャンスがあれば現場へ連れて行く。皆さんも機会があればぜひ新島襄に関する本を読んでみる、いろんな話をする、そして現地に足を運んで、この同志社という空間および歴史を自分のものにしてほしいと思っています。

今の皆さんに幸いなことには、『新島襄と建学精神』、この本をテキストとして「同志社科目」というのが今年から始まっています。履修していない人でも、大変読みやすい本で生協で五〇〇円で売っていますので、ぜひこれを読んでほしいと思います。僕らの学生時代にはこういう本がありませんでした。かなり難しい新島襄に関する本か、あるいはこの『新島襄書簡集』しかなかったのだけれど、大変読みにくい本なのです。今はこれがある。新版の『新島襄の手紙』がある。これの説明も大変分かりやすい。ぜひこういうものから、いろんな知識を得て、気づいて、考えて、そして行動をしてほしいと思っています。

二〇〇五年十一月十一日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録